

必ず生きて帰る 〜飢えと病気の戦場〜

二十八歳になった昭和十七年、兵隊になるよう手紙がきました。このころ、国のために兵隊として戦争に行くことは当たり前のことでした。私は浦臼という町で、お父さんや兄弟たちといっしょに木を切って板や柱を作る仕事をしていました。また、妻と六歳と三歳になる二人の子どもたちもいました。家族と別れて、死ぬかもしれない戦争に行くことになったのです。

この時、浦臼で兵隊になるよう手紙がきたのは、私を入れて五人でした。私は兵隊になるのが二回目で、一番年上でしたから、四人の面倒を見てあげなければと思いました。二十一歳から二十二歳ほどの、まだ結婚もしていないような若者たちでした。みんなで旭川へ行き、そこで軍隊に入りました。

旭川から汽車で広島へ、広島で船に乗り換えてサイパン島へ。サイパン島からトラック島へ。どこで戦つのか知らされず、南へ南へ移動しました。途中、家族へ手紙を書くこともできませんでした。家族は、私がどこに

いるのか、まだ無事であるのかもわからなかったのです。そして、いよいよ戦場に行くこと知らされました。場所はガダルカナル島です。

ガダルカナル島ではいつもおなかがすいていました。島には敵の飛行機や船がたくさんいたので、私たちに武器や食べ物、薬を運んでくる船をみんな沈めてしまうのです。何も食べずにいると、体が弱って死んでしまうと思い、島に生えている草を「飯ごう」でゆでて食べました。食べられる草はどれか、人が食べてみて大丈夫だった草をポケットにしまっておいて、その草を探して食べたものです。

ある時、日本からお米が届きました。本当にうれしかったです。ですが、それまで私たちは草ばかり食べていたので、すっかりおなかが弱って

ジャングルにおける移動の様子

ていました。だから、お米をうすいおかゆにして食べようと話し合いました。しかし、若い仲間がどうしてもふつうにたいご飯が食べたいといって食べたところ、苦しんで、苦しんで、二日目に死んでしまいました。

浜辺に生えているヤシの木の実も大切な食料でした。ですが、海には敵の船がいます。ある時、十一せきの船から一斉砲火をうけました。森にはにげず、海に飛び込んで木にしがみつ

ガダルカナル島

・飯ごう

外で煮炊き
するための、持ち運べるなべ。

・一斉砲火

たくさんの
船から、陸に向
かって一度に
こうげきした。

・ジャングル
ガダルカナルの深い森では、道も自分たちで切り開かなければならなかった。

・魚雷
水の中をスクリュウで進むミサイル。

・栄養失調
食べるものがなく、体が弱っていくこと。

ました。敵の弾が青白く光りながら、顔が熱くなるほど目の前の近くをヒュツと通って通り過ぎていきました。森は敵の弾でめちゃくちゃになっていました。森へにげていたら死んでいたと思います。

敵からにげて、ジャングルの中を何日も歩き続けました。食べ物ほとんど無く、何日もジャングルの中を歩いていけると、次々と仲間が病气やつかれて死んでいきます。武器も重くて、持って歩くことができずに途中で捨ててしまいました。草をゆでる「飯ごう」とヤシの実を食べるための「短剣」だけは捨てずに持ってにげました。



歩けなくなり、仲間とはぐれそうになることが何度もありました。もう歩くことができず、しゃがみこんで目をつぶると子どもたちの声が聞こえてきます。「父さん、今、父さんが死んだら僕たちどうすればいいの?」ここで死ぬわけには行かない、必ず生きて帰ろう、と思いました。何とか立ち上がり、仲間といっしょににげることができました。

島に来てから五ヶ月たった次の年の二月、ようやくガダルカナル島から引き上げる命令がきて日本に帰ることができました。私が乗る、一つ前の日本に向かう船は、敵の魚雷で沈められてしまいました。日本につくまでとても不安だったことを覚えています。旭川の部隊にたどりつくまで、一週間ほどして、浦臼に帰ってよいことになりました。



旭川から浦臼に帰ることになったとき、私は自分だけ生きて帰るのがつらくなりました。浦臼から戦争に行った五人の中で、生き残ったのは私だけだったからです。私は、家にはなにも知らせずに浦臼へ行く列車に乗りました。

途中、雨龍の駅で知り合いの駅長さんに会いました。私に「よく帰ってきたな!母さん(妻のこと)にはもう知らせたのか?」と聞くので、知らせていない、と話しました。駅長さんが電話で知らせてくれたのでしよう。浦臼の駅には、お父さんもお母さんも、妻も子どもたち一人も、みんなが待っていました。手紙も届かず、どこにいるのかもわからなかったため、私は死んだのではないかと思われていたようです。生きて帰ってきた私を見て、「神様のおかげだ」とみんな喜んでくれました。

私が浦臼に帰ってきたと聞いて、死んだ四人の家族が戦いの様子を聞きにきました。四人は栄養失調や病気で死んでしまったのですが、とても本当のことは言うことができませんでした。

今、私が思うことは、強い気持ちがあれば運命は変えられるということです。あの戦争も、もっともつと話し合って、相手のことをわかって、自分のことをわかってもらおうとすれば、あんなにたくさんの方が死なずにすんだのではないかと思います。